

# 基 本 計 画 書

基 本 計 画										
事 項	記 入 欄							備 考		
計 画 の 区 分	大学の学部の学科の設置									
フ リ ガ ナ 設 置 者	ガッコウホジシニホンイリョウダイガク 学校法人 日本 医 療 大 学									
フ リ ガ ナ 大 学 の 名 称	ニホンイリョウダイガク 日 本 医 療 大 学 (Japan Health Care College)									
大 学 本 部 の 位 置	北海道札幌市豊平区月寒東3条11丁目1番50号									
大 学 の 目 的	本学は、教育基本法および学校教育法の定めるところにより、学術の中心として、広く知識を授けるとともに、深く専門の学芸を教授研究し、知的、道徳的および応用的能力を展開できる保健医療福祉分野の人材の育成を目的とする。									
新 設 学 部 等 の 目 的	医療技術の高度化、多様化に対応できる、幅広い教養とグローバルな視野をもち、主体的に学び・考え・行動する人材の育成および地域医療・福祉に貢献することのできる臨床検査技師を育成することを目的とする。									
新 設 学 部 等 の 概 要	新 設 学 部 等 の 名 称	修 業 年 限	入 学 定 員	編 入 学 定 員	収 容 定 員	学 位 又 は 称 号	開 設 時 期 及 び 開 設 年 次	所 在 地		
	保健医療学部 (Faculty of Health Sciences) 臨床検査学科 Department of Clinical Laboratory Sciences 計	年	人	年次人	人	学 士 (臨床検査学)	令和3年4月 第1年次	札幌市豊平区月寒東3条11丁目1番50号		
同一設置者内における変更状況(定員の移行、名称の変更等)	保健医療学部 看護学科(収容定員増) (50)(令和2年6月認可申請) 診療放射線学科(収容定員増) (50)(令和2年6月認可申請)									
教 育 課 程	学 部 等 の 名 称	開 設 す る 授 業 科 目 の 総 数				卒 業 要 件 単 位 数				
		講 義	演 習	実 験 ・ 実 習	計					
	保健医療学部 臨床検査学科	71 科目	23 科目	20 科目	114 科目	124 単位				
教 員 組 織 の 概 要	学 部 等 の 名 称		専 任 教 員 等					兼 任 教 員 等		
			教 授	准 教 授	講 師	助 教	計	助 手		
	新 設 分	臨床検査学科	5人 (4人)	0人 (0人)	5人 (0人)	2人 (1人)	12人 (5人)	0人 (0人)	36人 (17人)	学科の申請
		計	5人 (4人)	0人 (0人)	5人 (0人)	2人 (1人)	12人 (5人)	0人 (0人)	36人 (17人)	
	既 設 分	保健医療学部 看護学科	19人 (16人)	8人 (3人)	11人 (5人)	6人 (5人)	44人 (29人)	3人 (3人)	53人 (53人)	
		リハビリテーション学科	8人 (8人)	4人 (4人)	4人 (4人)	2人 (2人)	18人 (18人)	0人 (0人)	80人 (80人)	
		診療放射線学科	6人 (6人)	4人 (4人)	1人 (1人)	0人 (0人)	11人 (11人)	1人 (1人)	57人 (57人)	
計		33人 (30人)	16人 (11人)	16人 (10人)	8人 (7人)	73人 (58人)	4人 (4人)	190人 (190人)		
合 計		38人 (34人)	16人 (11人)	21人 (10人)	10人 (8人)	85人 (63人)	4人 (4人)	226人 (207人)		

教員以外の職員の概要	職 種	専 任	兼 任	計					
	事 務 職 員	45人 (45人)	8人 (8人)	53人 (53人)	大学全体				
	技 術 職 員	(-)	(-)	(-)					
	図 書 館 専 門 職 員	2人 (2人)	0 (0人)	2人 (2人)	大学全体				
	そ の 他 の 職 員	2人 (2人)	(-)	2人 (2人)					
	計	49人 (49人)	8人 (8人)	57人 (57人)					
校 地 等	区 分	専 用	共 用	共用する他の 学校等の専用	計	(借用地) 校舎敷地 30年 49,128.28㎡ 運動場、20年 13,710㎡			
	校舎敷地	35,418.28㎡	0㎡	0㎡	35,418.28㎡				
	運動場用地	13,710㎡	0㎡	0㎡	13,710㎡				
	小 計	49,128.28㎡	0㎡	0㎡	49,128.28㎡				
	そ の 他	0㎡	0㎡	0㎡	0㎡				
合 計	49,128.28㎡	0㎡	0㎡	49,128.28㎡					
校 舎	専 用	共 用	共用する他の 学校等の専用	計	㎡				
	9,885.93㎡ (9,885.93)㎡	0㎡ (0)㎡	0㎡ (0)㎡	9,885.93㎡ (9,885.93)㎡					
教 室 等	講 義 室	演 習 室	実 験 実 習 室	情報処理学習室	語 学 学 習 室				
	30室	48室	35室	2室	情報処理室と共用				
専任教員研究室	新 設 学 部 等 の 名 称			室 数					
	保健医療学部 臨床検査学科			12室					
図 書 ・ 設 備	新設学部等の名称	図 書 (うち外国書)	学 術 雑 誌 (うち外国書)	電 子 ジ ャ ー ナ ル	視聴覚 資 料	機 械 器 具	標 本	データベース3	
	臨床検査学科	543 (30)	5 (0)	1 (0)	22 (0)	0	0		
	計	543 (30)	5 (0)	1 (0)	22 (0)	0	0		
図 書 館	面 積		閱 覧 座 席 数		収 納 可 能 冊 数			大学全体	
	1,670.00㎡		270席		84,240冊				
体 育 館	面 積		体 育 館 以 外 の ス ポ ー ツ 施 設 の 概 要					大学全体	
	930.00㎡		ス ポ ー ツ ジ ム						
経費の見積り及び維持方法等の概要	区 分	開設前年度	第1年次	第2年次	第3年次	第4年次	第5年次	第6年次	単位:千円
	教員1人当り 研究費等	-	300	300	300	300	-	-	
	共同研究費等	-	3,000	3,000	3,000	3,000	-	-	
	図書購入費	9,717	-	-	-	-	-	-	
	設備購入費	87,000	-	-	-	-	-	-	
	学生1人当り納付金		第1年次	第2年次	第3年次	第4年次	第5年次	第6年次	
		1,900千円	1,600千円	1,600千円	1,600千円	-千円	-千円		
学生納付金以外の維持方法の概要			寄附金、補助金等による						

既設大学等の状況	学部等の名称	修業年限	入学員	編入学員	収容員	学位又は称号	定員超過率	開設年度	所在地
	保健医療学部					学 士			
	看護学科	4	100	—	400	看護学	1.09	平成26年度	北海道札幌市豊平区月寒東3条11丁目1番50号
	リハビリテーション学科	4	120	—	480	リハビリテーション学	0.76	平成27年度	
診療放射線学科	4	50	—	200	診療放射線学	1.19	平成28年度		
付 属 施 設 の 概 要	該当なし								

教 育 課 程 等 の 概 要															
(保健医療学部 臨床検査学科)															
科目区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考	
			必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手		
基礎 教育 科目	人間 と 生活	生命科学	1後	1			○								兼1
		心理学	1前	1			○								兼1
		コミュニケーション学	1前	1			○								兼1
		倫理学	1前		1		○								兼1
		生命倫理	1後		1		○								兼1
		医療と哲学	1後		1		○								兼1
		人間関係の科学	1前		1		○								兼1
		文化人類学	1後		1		○								兼1
		医療と社会	1後		1		○								兼1
		法学	1前		1		○								兼1
		教育学	1前		1		○								兼1
		北海道史	1前		1		○								兼1
		ボランティア論	2前		1		○								兼1
科学 的 思考 の 基礎	物理学	1前		1		○			1					兼1	
	化学	1前	1			○								兼1	
	生物学	1後	1			○								兼1	
	生活と運動	1前		1			○							兼1	
	健康とスポーツ	1前		1			○							兼1	
	数学	1前	1			○								兼1	
数学(統計学)	1後	1			○								兼1		
語 学	日本語表現	1前		1			○							兼2	
	英語Ⅰ	1前	1				○							兼1	
	英語Ⅱ	1後	1				○							兼1	
	英語Ⅲ	2後	1				○							兼1	
	中国語	1後		1			○							兼1	
	韓国語	2前		1			○							兼1	
小計(26科目)		-	10	16	0		-		1	0	0	0	0	兼12	
専門 基礎 教育 科目	人体 の 構 造 と 機 能	解剖学	1前	1			○			1					共同  共同
		解剖学演習	1後	1				○		2					
		組織細胞学	1前	1			○			1					
		組織細胞学実習	1後	1					○	2					
		生理学Ⅰ	1前	1			○							兼1	
		生理学Ⅱ	1後	1			○					1		兼1	
		生化学Ⅰ	1前	1			○								
		生化学Ⅱ	1後	1			○			1					
	と そ の 検 査 の 基 礎 と の 関 連	病理学	1後	1			○			1					兼1 兼1
		免疫学	1前	1			○				1				
		臨床栄養概論	1前	1			○								
		臨床薬理概論	2後	1			○								
		臨床病棟検査概論	3後	1			○					1			
臨床検査入門	1前	1			○			4		3			オムニバス方式		
保 健 医 療 検 査 と 福 祉	保健医療福祉概論	1前	1			○						1		兼1	
	公衆衛生学	2前	1			○				1				兼1	
	救命救急検査概論	3後	1			○						1			
	地域医療連携学	3前	1			○							1		
	チーム医療と臨床検査	3後	1			○			1		2	1		兼1	
び 医 療 情 報 工 学 及 医 用 工 学	情報科学	1前	1			○								兼1	
	情報科学演習	1前	1				○							兼1	
	医用工学	1前	1			○								兼1	
	医用工学実習	1後	1					○						兼2	
小計(23科目)		-	23	0	0		-		5	0	5	1	0	兼8	

教 育 課 程 等 の 概 要																		
(保健医療学部 臨床検査学科)																		
科目区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考				
			必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手					
専門教育科目	臨床病態学	臨床検査医学総論Ⅰ	1後	1			○								兼1	共同		
		臨床検査医学総論Ⅱ	2前	1			○								兼1			
		症例細胞診検査学	3後	1			○			2								
		症例血液・染色体検査学	3後	1			○					1						
		症例微生物・感染制御学	3後	1			○			1		1					共同	
		症例臨床化学・免疫検査学	3後	1			○			1		2	1				共同	
		症例輸血検査学	3後	1			○					2					共同	
		症例超音波検査学	3後	1			○			1			1				共同	
	臨床検査総論演習	4後	4				○		5		4	1				オムニバス方式		
	形態検査学	病理検査学	2前	1			○			1						兼1 兼1	共同 共同	
		細胞検査学	3前	1			○			1								
		病理検査学実習	2前	1					○	2								
		細胞検査学実習	3前	1					○	2								
		臨床血液学Ⅰ	2前	1			○					1						
		臨床血液学Ⅱ	2後	1			○					1						
		臨床血液学実習Ⅰ	2後	1					○	1		1						兼1
		臨床血液学実習Ⅱ	3前	1					○	1		1						兼1
	病理検査学総合演習	3後	1					○	1									
	血液検査学総合演習	4前	1					○			1							
	生物化学分析検査学	一般検査学Ⅰ	1後	1			○					1				兼1 兼1	共同 共同	
		一般検査学Ⅱ	2前	1			○					1						
		一般検査学実習	2前	1					○	1		1						
		臨床化学Ⅰ	1後	1			○					1						
		臨床化学Ⅱ	2前	2			○			1								
		臨床化学実習Ⅰ	2前	1					○	1		1						
		臨床化学実習Ⅱ	2後	1					○	1		1						
		遺伝子・染色体検査学	3前	1			○			1		1						オムニバス方式
遺伝子検査学実習	3後	1					○	2			1			共同				
一般検査学総合演習	3後	1					○											
分析検査学総合演習	3後	1					○	1										
病因・生体防御検査学	医動物学	2後	1			○					1				兼1 兼1	共同 共同		
	微生物学	2前	1			○			1									
	臨床微生物学Ⅰ	2後	1			○			1		1							
	臨床微生物学Ⅱ	3前	1			○					1							
	臨床微生物学実習Ⅰ	2後	1					○	1		1							
	臨床微生物学実習Ⅱ	3前	2					○	1		1							
	臨床免疫学Ⅰ	2前	1			○					1							
	臨床免疫学Ⅱ	2後	1			○					1							
	臨床免疫学実習Ⅰ	2後	1					○	1		1	1					兼1	
	臨床免疫学実習Ⅱ	3前	1					○			1	1					兼1	
	輸血・移植検査学	3前	1			○					1							
	輸血検査学実習	3後	1					○			2						兼1	
微生物検査学総合演習	4前	1					○			1								
免疫検査学総合演習	4前	1					○			1								
生理機能検査学	臨床生理学Ⅰ	2前	1			○			1						兼1 兼1	共同 共同		
	臨床生理学Ⅱ	2前	1			○						1						
	臨床生理学Ⅲ	2後	1			○						1						
	臨床生理学Ⅳ	3前	1			○			1									
	認知症検査概論	3後	1			○												
	臨床生理学実習Ⅰ	2後	2					○	1			1						
	臨床生理学実習Ⅱ	3前	2					○	1			1						
生理機能検査学総合演習	4前	1					○	1			1							
検査総合管理学	検査機器総論演習Ⅰ	1後	1				○		3		1				兼1	オムニバス・共同 オムニバス方式 オムニバス方式 オムニバス方式 オムニバス方式		
	検査機器総論演習Ⅱ	1後	1				○		4		3							
	専門検査技師総論	3後	1			○			3		3							
	臨床検査管理学Ⅰ	3後	1			○			1			1						
	臨床検査管理学Ⅱ	3後	1				○		1									
	臨床検査マネジメント論	3後	1			○						1						
	関係法規	3前	1			○						1						
臨床検査総合実習	4前	1					○	5		5	1							
医療安全管理学	感染管理学	2前	1			○					1	1			兼17	オムニバス方式 オムニバス方式 共同		
	医療安全管理学	2前	1			○					1	1						
	医療安全管理学実習	2前	1					○			2	1						
臨地実習	臨地実習	4後	7					○	5	0	5	1	0		共同			
卒業研究	卒業研究	4通	4					○	5	0	5	1	0		共同			
	小計(65科目)	-	81	0	0		-		5	0	5	2	0		兼36			
	合計	-	114	16	0		-		5	0	5	2	0		兼36			

学位又は称号	学士（臨床検査学）	学位又は学科の分野	保健衛生学関係（看護学関係及びリハビリテーション関係を除く。）
卒業要件及び履修方法		授業期間等	
(1) 基礎教育科目 20単位以上（必修10単位 選択10単位以上*） *選択11単位は「人間と生活」選択10単位から6単位以上 「科学的思考の基礎」選択3単位から2単位以上 「語学」選択3単位から2単位以上 (2) 専門基礎教育科目 23単位（必修23単位） (3) 専門教育科目 81単位（必修81単位） 卒業要件 124単位以上 必修114単位 選択10単位以上 （履修科目の登録上の上限：23単位/学期、45単位/年間）		1学年の学期区分	2学期
		1学期の授業期間	15週
		1時限の授業時間	90分

授 業 科 目 の 概 要				
(保健医療学部臨床検査学科)				
科目区分	授業科目	講義等の内容	備考	
基礎教育科目	人間と生活	生命科学	「生命」について、細胞学、発生学、分子生物学、生理学、遺伝学などの各学問から、生命科学の基礎的知識を学ぶ。生命の基本的単位である細胞の生命活動を支えるエネルギー源と身体の恒常性維持機能について、栄養・代謝・ホルモン・生体防御などの知識から理解する。遺伝子の自己複製と遺伝情報の発現の仕組みを概説し、生命の連続性と多様性について理解することで、人間一人ひとりが、かけがえのない多様な生命の一個体であることを理解するとともに、生命の尊厳について科学的視点から考えることを目的とする。	
		心理学	医療の対象者を理解する場合に、欠かせないのが人を全人的にとらえる視点である。本講義は心理学の入門として、幅広い心理学の基礎的知見を紹介し、心理学的に人間を理解する視点を涵養することを目的とする。内容としては現代心理学の諸領域を概観し、人の心のしくみについて学ぶ。また、日常のさまざまな場面や状況における人の行動や反応に対して、心理学的知識や理論にもとづき理解し、考察する。さらに、心の健康についても学修を深め、心の病を身近なものとして理解することを期待したい。人格心理学の領域は「人間関係論」で取り扱い、本講義で多くは触れないため、合わせて受講することが望ましい	
		コミュニケーション学	心理学、社会学、言語学、社会心理学などの学問から、コミュニケーションの概念、過程、構成要素などの基本理論を説明する。言語的コミュニケーションと非言語的コミュニケーション、コミュニケーションスタイルのタイプと特徴などを挙げて、それらの知識を基に、身近なコミュニケーション行動を考察する。交流分析やアサーティブコミュニケーション、傾聴法などの知識を得て、自らのコミュニケーションの傾向を知り、効果的なコミュニケーションを図る上での課題を講義する。	
		倫理学	「倫理」とは人が生きていくために価値や規範としての「ありかた」を問い続ける学問である。そして医療はそのなかで「あるべき」姿を追いかけることの困難さを実感し続ける現場である。本科目では医療倫理学の基礎として、前半では医療人としての倫理観を磨くために必要とされる視点や方法を学ぶ。後半では医療人にとって臨床での倫理的判断や立場に大きな影響を与える多くの項目のうち、もっとも基盤的なものであるパターンリズムおよびインフォームド・コンセントを対象に、日常感覚との接点という角度から考察する。	
		生命倫理	19世紀以降に科学的な形態となった医学は急速な発展を遂げたが、それまでの医学にはなかった新たな倫理的問題も生み出した。現代医学は確かに有効性を高めたものの、けっして万能ではない。そのジレンマと最終的に向き合わざるを得ないのは臨床で活動する医療人である。現場で日常的に遭遇する倫理的判断には明確な解答が出せないものがほとんどであり、悩み苦しむ患者を支援する医療者もまた悩み続けてきた。こうした医療者の苦悩に指針を示すものとして20世紀に成立した学問が生命倫理学である。ただし、その目的はあくまでも「議論を深めること」であり、「明確な解答」の提示ではない。 本科目では、生命倫理領域で問題とされてきた基本的なテーマの考察を通して、患者尊重という方向性が確立したかに見える現代医療が常にジレンマと表裏一体であることを学ぶ。	

基礎教育科目	人間と生活	医療と哲学	<p>「哲学」という学問は本来「知を愛する」という意味をもつ。しかし「患者のため病に対処する」という立場で働く医療人にとっての「知」とは何かを「明確にすること」を目的とする場合が多く、知的作業が限局化しやすい傾向がある。さらに臨床では、そもそも明確化が不可能または困難であるという事実、しばしば直面するため、医療人が知的作業そのものに苦痛を感じやすい環境でもある。しかし倫理的判断の基準の多くは哲学的考察の中から提示されており、知的作業への取り組みは重要である。</p> <p>本科目では、医療人の身近にある概念のいくつかを題材に、いわゆる「境界の不明瞭性」を見つめなおす思考作業を通して「医学では明確にならないもの」をあえて考えることの意義と面白さを学ぶ。</p>	
		人間関係の科学	<p>医療現場では医療従事者を対象者との間に密接な人間関係が成立することから、円滑な人間関係の維持が求められる。本講義では人間関係に関わる心理学的基礎として「自己理解」、「他者理解」、「相互理解」について取り上げる。また、人間関係を維持する具体的なスキルについても学修する。さらに、とくに医療従事者と対象者との間には上下関係が生じやすいことから、パターンリスティックに陥らない人間関係にも注目し、学修を深める。</p>	
		文化人類学	<p>「地球市民の基礎教養」といわれる文化人類学は、心理学と同じ考現学の一種である。その目的は異文化理解力を身に付け、他者を深く理解するとともに、自らの文化・社会を正確に認識することにある。また、具体的な事例を、聞き取り調査と参与観察による現地のフィールドワークで収集し、データ化するという特徴がある。</p> <p>下位分類が多様なこの学問から、今年度は介護人類学と医療人類学を講義内容とした。文化的な身体とは何か、ケアとは、死とは何かなど、医療関係者を目指す学生たちには、是非一度聞いてほしい講義である。</p>	
		医療と社会	<p>「社会」とは弱者戦略として人が群れることで成立するものである。一定の条件のもとに私たちは様々な社会に所属しているが、社会学では家族や地域といった基礎的集団をまずは説明し、その後、家族や地域社会が今生きている医療や介護の現実について学んでもらう。家族社会学の成果からは日本の近代家族の特徴について解説し、その崩壊の一部についても学修する。あるいは健全な家族関係の阻害要因であるDV等について学ぶ。地域に関しては超高齢社会の到来がもたらすあらたな共生社会作りや地域包括ケアシステムに関する学修を行い、病院完結型社会への変化や社会の看取り力を向上させるための様々な試みから、死の社会学について学修する。</p>	
		法学	<p>1人の社会人として、また医療に従事する者として必要な日本国憲法の基本的な知識と人権感覚を身に付けるために、日本国憲法の基本的な考え方、統治の構造、基本的人権の保障について学びます。憲法は誰のためにあるのか、日本国憲法の基本原理は、なぜ基本的人権の保障、国民主権、平和主義なのか、現実の憲法問題に対して日本国憲法はどのように機能しているのかについて解説します。</p> <p>講義では具体的な憲法問題を取り上げ、日本国憲法が現実にとどのように解釈され、運用されているのかについて、判例・学説を紹介しながら解説し、その問題点を理解することを目指します。</p>	
教育学	<p>生涯学習時代の教育学について講義する。グローバルにしてローカルな時代の生涯学習を見て行く基本視点と日本における課題を示した上で、教育の原論・本質論・実践論・計画論の諸領域について、具体的な事例をあげつつ講義形式で進める。</p>			



	人間と生活	北海道史	北海道の場合、ほとんどの学生がこれまでに北海道史を学んでいないことが多い。足元の歴史を、是非学修してほしい。私たちの祖先は、どのようにして今日までの北海道での生活を築いてきたのかを、本講義では主に近代史をとおして学修する。そのため、この講義でいう北海道史とは、和人による「蝦夷島」入植・定住の歴史と、先住民による生活と文化のあゆみ、この二つの歴史からなっている。この授業は、「日本の歴史」における「北海道史」の独自性を理解したうえで、その足跡を歴史資料に即して縦覧しようとするものである。もしくは、最後に医療関係者を志す者として知っておいてほしい北海道の医療史の概略も講義する。「体験的自学自習のためのフィールドワーク用副読本」を片手に、是非、北海道の史跡や歴史資料を読み解く作業をとおして個々のさらなる学びにつなげてほしい。	
		ボランティア論	ボランティア活動は「個人の自由意思にもとづき、自らの技能や時間等を提供し、他者や社会に貢献する活動」と考えられるが、単に社会貢献にとどまらず、地域社会を主体的に創造する市民参加活動であり、自己実現の手段の一つと考えられる。本講義では、ボランティアの歴史、多様なボランティアの現状を概観し、身近なテーマをもとに実際のボランティア体験をシミュレーションし、ボランティアの価値を理解することを目指す。	
基礎教育科目	科学的思考の基礎	物理学	物理学は、自然界のあらゆる現象を包括的に理解するための理論を構築する自然科学のひとつであり、臨床検査に利用される機器の原理や、生命現象を科学的に理解するうえで、必要不可欠な科目である。具体的な内容として、各種単位、力学、音波・超音波、原子と放射線などを扱い、臨床検査学科の専門科目の理解につなげる。	
		化学	化学は、生化学、臨床化学検査学などを学ぶための基礎となる重要な学問である。臨床検査技師教育の基礎科目として必要な化学の知識を修得する。 本科目では、物質の化学的性質や無機および有機化合物の性質についての概念を熟知し、専門科目を学ぶうえで、また臨床検査技師として業務を遂行するうえで必要な知識を修得する。	
		生物学	生物についての基礎知識は、医療従事者として専門科目を学修するための基礎として必要不可欠であるとともに、生命倫理観をもつためにも重要である。本科目では生物の生命現象を細胞、組織、器官、固体の各レベルから概観し、生物学の基礎を幅広く学修し、専門基礎科目へつなげることを目的とする。具体的には、生命の基本単位である分子、細胞、組織から遺伝子まで生体の成り立ちを系統的に学修する。	
		生活と運動	生活動作と運動量、運動機能と心肺機能の仕組みを理解し、身体運動を通して、身体の変化と効果を学ぶ。体力低下や運動不足から生じる健康問題について学び、持久力、筋力アップの体力づくりや、ストレッチ、柔軟体操、野外活動など、疲労回復やストレス発散を目的としたリラクゼーションの原理と方法について学ぶ。地域散策や集団ラジオ体操などの地域コミュニティとの交流や、冬の雪道歩行、雪かきにおける安全な身体運動の方法など、生活における運動を健康科学的視点から考える。	
		健康とスポーツ	寿命をのばす運動プログラム、腰痛、肩こり改善の運動プログラム、高齢者の転倒・骨折予防の運動プログラム、肥満予防の運動プログラム、生活習慣病予防の運動プログラムなどを実際に体験し、健康づくりの運動のあり方と実践的な指導方法および評価法について学ぶ。また、民間でおこなわれている健康教室のプログラムなどから、運動が健康づくりにどう取り入れられているか、グループ運動の効果やスポーツ文化として人と人との交流にどう役立っているかを学ぶ。	

基礎教育科目	科学的思考の基礎	数学	臨床検査学において、数学の基本的知識は医用科学や統計において根幹をなすものであり、科学的判断においても大変重要である。この講義では高等学校までに標準的に学ぶ数学について、例題などを活用し復習することで、医用科学や統計学に必要な基礎を学ぶことを目的とする。数学Ⅰでは、確率変数と確率分布、統計、推定について学修する。	
		数学（統計学）	臨床現場から得られる多様で豊富なデータ（ビッグデータ）に対して、統計的処理や検定を行い、それをどう活用するかはとても重要である。また、統計学を理解することは、データの理解、因果関係、「根拠（エビデンス）に基づく医療（EBM：evidence based medicine）」を実践するためには不可欠であり、それがより良い医療の提供の助けとなる。本講義では、統計学の推定・検定の解説および例題を用いて、基本的な推定・検定の手法を身につけることを目的とする。	
	語学	日本語表現	本科目の目的は、広く社会に通用する基本的な言語表現力を身に付けることにある。コース前半では、「文書作成の技術」と題し、大学での学修に不可欠な文書作成技法について学ぶ。社会の一般的ルールに加え、臨床検査領域における作法なども学修の視野に入れる。コース後半では「日本語力を磨こう」と題し、場面に応じたわかりやすい日本語表現について学ぶ。なお本講義では、グループワークや相互チェックなど演習型の教室内活動を多く取り入れる。 （オムニバス方式/全15回） （15山田 敦士/8回）ガイダンス、文書作成の技術（レポート論文の作法を学ぶ）、中間課題への取り組み、最終課題への取り組み、 （34神谷 奈保子/7回）日本語力を磨こう（場面にふさわしい日本語表現を考える）	オムニバス方式
		英語Ⅰ	医療に関する様々なトピックを英文で読み基本的な読解力を高めるとともに、理解した内容を伝達するための英語による発信力（文法力、伝わる発音とリズム、自然な表現）の総合的向上をめざす。英文を正確に読むためのスキルを身に付け、いろいろな英文を読むことで単語理解や語彙力の向上を図り、それらを活用して自然な英語表現の修得につなげる。国際的な医療活動や医療トピックを中心とした多様な文献及び映像教材を通して、外国の文化や社会、外国人の価値観などを知る機会、異文化交流の動機付けとなり、今後の語学学修のモチベーションとなることを期待する。	
		英語Ⅱ	このクラスでは、ロールプレイ、ペアワークなどで場面を想定して英語の修得をめざします。英語について考えること、発音練習、会話によるコミュニケーションが重視されます。英語を話すときに自文化について考え、他文化への理解を深めてもらいたいです。言葉によるコミュニケーションと言葉によらないコミュニケーションの両方に取り組みます。	
		英語Ⅲ	この教科では、保健医療分野における英文文献を教材として、正確に、論理的・批判的に読解する能力を身に付け、論文の内容を要約できることを目的とする。グループ抄読をとおして、英文や論文内容の解釈についてディスカッションすることで、英文文献抄読を主体的に学修するための基礎的能力を育成することを目的とする。また、外国人の患者にも対応できるように一般的に必要な医療現場におけるコミュニケーション能力の向上にもつとめる。eラーニングは発音と会話の実践において重要な役割を果たす。	

基礎教育科目	語学	中国語	<p>隣国である中国とは、人事交流をはじめとして、経済・文化などすべての面で交流が盛んになっている。医療のグローバル化に向けて、国際的な動向をコミュニケーションをとおして理解することはきわめて重要である。</p> <p>本授業では、中国語の基礎や簡単な会話を学びつつ、現代中国の社会や文化についての理解をはかる。異文化理解および外国語学修に意欲をもった履修を強く求めたい。</p>	
		韓国語	<p>隣国である韓国とは、人事交流をはじめとして、経済・文化などすべての面で国家間交流が盛んになっている。医療のグローバル化に向けて、国際的な看護の動向を知り、コミュニケーションをとおして理解することは重要である。そのため、本教科では韓国語の文字、発音など基礎的なことから日常生活で使う簡単な会話と読解能力を育成することを目的とする。また、本講義では韓国語をより上達させるため、コミュニケーションの背景知識になる韓流ドラマ・K-pop・動画などを活かし、韓国の社会や文化などを紹介し、理解を深める。</p>	
専門基礎教育科目	人体の構造と機能	解剖学	<p>解剖学は、人体の基本的構造および正常構造を学ぶ最も基礎的な学問である。正常な人体の形態と構造を細胞レベルから組織、器官、器官系まで統合して理解することが目的である。人体には様々な機能があり、その働きに異常をきたせば病気になる。そのため臨床検査学を学ぶうえで、解剖学を理解することは必要不可欠である。解剖学では、人体の構成骨格系、筋系、循環器系、消化器系の各種名称、構造、位置関係、機能について学修する。</p>	
		解剖学演習	<p>解剖学は、人体の基本的構造および正常構造を学ぶ最も基礎的な学問である。正常な人体の形態と構造を細胞レベルから組織、器官、器官系まで統合して理解することが目的である。人体には様々な機能があり、その働きに異常をきたすと病気になる。そのため臨床検査学を学ぶうえで、解剖学を理解することは必要不可欠である。解剖学実習では、解剖学で学んだ知識をもとに、人体模型を観察し、スケッチすることで、より理解を深める。</p>	共同
		組織細胞学	<p>本科目では、ヒトの体を構成している最小単位の「細胞」、細胞が互いに結合した集合体「組織」、複数の組織の集合体「器官」について、その微細構造を顕微鏡レベルで学び、それぞれの機能について理解することを目的とする。具体的には、上皮組織、支持組織、筋組織、神経組織、脈管系、血液と骨髄、リンパ性器官、消化器系、呼吸器系、泌尿器系、生殖器、内分泌系、皮膚、感覚器について学修する。</p>	
		組織細胞学実習	<p>本科目では、ヒトの体を構成している最小単位の「細胞」、細胞が互いに結合した集合体「組織」、複数の組織の集合体「器官」について、その微細構造を顕微鏡レベルで学び、それぞれの機能について理解することを目的とする。組織細胞学実習で、上皮組織、支持組織、筋組織、神経組織、脈管系、血液と骨髄、リンパ性器官、消化器系、呼吸器系、泌尿器系、生殖器、内分泌系、皮膚、感覚器の実際の標本を顕微鏡で観察し、スケッチすることで正常な組織の構造と、その特徴について学修する。</p>	共同
		生理学 I	<p>本科目では、ヒトにおける各種器官、組織、細胞の機能、およびそれらを統合したヒト全体の機能について学修する。解剖学や生化学と同様に臨床医学の根幹となる科目であり、臨床検査技師にとって、多種多様な病気の本態を生体機能の乱れとして正しく理解するために生理学を修得することは重要である。生理学 I では、細胞・組織、心・血管系、呼吸器系、消化器系、腎臓、血液、造血器、凝固、免疫について学修する。</p>	

専門基礎教育科目	人体の構造と機能	生理学Ⅱ	本科目では、ヒトにおける各種器官、組織、細胞の機能、およびそれらを統合したヒト全体の機能について学修する。解剖学や生化学と同様に臨床医学の根幹となる科目であり、臨床検査技師にとって、多種多様な病気の本態を生体機能の乱れとして正しく理解するために生理学を修得することは重要である。生理学Ⅱでは、神経系、感覚系、代謝・栄養系、内分泌系、生殖系、運動系、筋肉について解説し、学修する。	
		生化学Ⅰ	生化学は、生体内の様々な事象について、それら生体物質の構造や機能、代謝等を化学的に説明していく授業である。生命現象を探求する上で多くの学問の基礎となり、今後の授業となる臨床検査の専門領域を体系的に考え、各種検査法の理解はもちろん、より疾患特異性の高い検査法の発展などにつなげる。生化学Ⅰでは、細胞の構成や役割、糖質、脂質、タンパク質、核酸や酵素などの生体物質の構造と機能について学修する。	
		生化学Ⅱ	生化学は、生体内の様々な事象について、それら生体物質の構造や機能、代謝等を化学的に説明していく授業である。生命現象を探求する上で多くの学問の基礎となり、今後の授業となる臨床検査の専門領域を体系的に考え、各種検査法の理解はもちろん、より疾患特異性の高い検査法の発展などにつなげる。生化学Ⅱでは、糖質や脂質、タンパク質などの生体物質の代謝や情報伝達のしくみなどについて学修する。	
	医学検査の基礎とその疾病との関連	病理学	病理学は、疾病の病因を解析し、さらに病因による疾病の発症機序を解明する学問である。病理学は、基礎医学と臨床医学との中間的な立場にあり、橋渡しの役割がある。そのためには、各臓器の代表的な疾病を理解することが重要である。本科目では、染色体などの異常、炎症、腫瘍、循環器系、呼吸器系、消化器系、内分泌系、泌尿器系、生殖器、造血臓器系、神経系などの疾病について病理学的に解説し学修する。	
		免疫学	免疫とは自己と非自己を区別する機構であり、様々な外的要因あるいは体内で生じる異変から自己を保護し、生体を維持するうえで必要不可欠なメカニズムである。また、免疫において重要なファクターである抗原抗体反応は、臨床検査において免疫学的検査はもちろん、その他さまざまな検査においても測定原理として用いられる。本科目では、免疫学の基礎的内容についての講義を通じ、専門分野である免疫検査学へとつながる素養を養成する。	
		臨床栄養概論	我々の身体の形成や機能の維持は、食物（栄養素）の摂取によって行われており、人の健康状態が左右される。この健康と深い関わりを持っているものが栄養であり、栄養とは食物を通して、人の健康状態に影響を与えるものである。本講義では、栄養素がどのように体内で消化吸収され代謝されるか、またその調整機構について解説する。さらに、各栄養素の役割や過不足が身体に及ぼす影響や栄養状態の評価と栄養計画の基本についても学修する。	
臨床薬理概論	本科目では、臨床検査技師として理解すべき代表的な薬物の作用機序、副作用、毒性、生体への薬理作用などの基礎知識を学修する。特に、主要疾患に対する薬物療法の場、薬物の吸収、移動、分布と薬物の作用動態や副作用などについて、具体的な臨床データを紹介しながら学修する。薬物を使用する際の基本的な留意点や、臨床検査に関わる各種検査に及ぼす薬剤、血中薬物濃度測定についても学修する。			

専門基礎教育科目	医学検査の基礎とその疾病との関連	臨床病棟検査概論	病棟業務全体を把握し、より患者の近くで臨床検査を活かした取り組みが必要です。病棟臨床検査技師の業務内容は、採血、翌日の採血管準備と患者への検査説明、医師への異常値報告、ベッドサイドでの検体検査・生理検査、糖尿病療養指導（SMBG）、感染症管理、インフルエンザ等の検体採取等と多くの業務があります。他職種と連携して謙虚な姿勢・明るいコミュニケーションを行うことによってチーム医療の向上になり、臨床検査技師としての業務拡大に繋がります。本講義では、病棟臨床検査技師としての役割、具体的な業務について学修する。	
		臨床検査入門	臨床検査の仕事は多岐の専門分野に分けられる。そこで、専門分野の科目を学修する前に、それぞれの分野が、医療現場の中でどのような役割を担っているか、また、どのような検体種、あるいは患者部位を用いて、どのような検査を行い、結果報告されるか、さらに、その検査結果が患者の診断や治療にどのように活かされているかなど、各分野の検査の流れ、役割や意義を学び、臨床検査技師の全体像について理解を深める。 (オムニバス方式/全8回) (②澁谷 斉/1回) 一般検査、(5 梅森 祥央/1回) 臨床化学検査、(8 高橋 裕之/1回) 血液検査、(1 品川 雅明/1回) 微生物検査、(10 魚住 諒/2回) 免疫検査、輸血検査、(4 西田 睦/1回) 生理検査、(①浅沼 広子/1回) 病理検査	オムニバス方式
	保健医療福祉と医学検査	保健医療福祉概論	保健・医療・福祉の制度を理解し、予防医学と検査の関連ならびに疫学的分析法の理論と技術を学び、医療チームの一員としての自覚を養う。保健医療、医学の歴史、病院の各部門の役割、医療制度・体制、医療法とその改正、社会保障費と医療財政、医療の質の維持と向上などについて保健医療福祉分野の健康支援の各役割と連携、その中での臨床検査技師としての役割について学ぶ。また、超高齢化社会における保健医療福祉に関連した現状と課題についても学修する。	
		公衆衛生学	本科目では、予防医学、健康管理、疫学、感染症、生活習慣病、精神保健、環境問題、衛生統計などについて学修する。日本では、急速に進む高齢化社会や、麻疹・風疹、その他感染症の流行、PM2.5などの環境問題、また北海道胆振東部地震のような自然災害等の影響など様々な要因により健康被害・健康危機に脅かされている。このような現代社会において、公衆衛生学を学ぶことにより、環境問題・健康被害など様々な最新の動向について科学的に理解し、的確に理解・行動できる能力を身につける。 (オムニバス方式/全8回) (③小池 祐史/4回) 公衆衛生学総論、疫学、感染症、母子保健、成人保健、学校保健、精神保健、生活環境、 (28 八重樫昭徳/4回) 公害、栄養と食品衛生、産業保健、衛生統計、衛生行政、衛生法規、社会保障、環境試験	オムニバス方式
		救命救急検査概論	近年、各医療施設における24時間体制の日常化に伴い、救急医療や緊急検査、時間外検査に対する検査技師の配置やその需要は今後益々高くなると考えられている。本講義では、救急診療における臨床検査技師の役割について学び、救急診療における情報の把握、救急患者に対して現状の検査機器を有効に使い、安全・迅速・円滑・適切な検査ができる技術や知識について学修する。	

	保健医療福祉と医学検査	地域医療連携学	地域の急性期・慢性期・療養の医療機関から在宅までを学び、医療と福祉・介護の連携について学ぶ。病院内情報の共有と院内外への発信、クレーム対応など患者にとって最適な連携を推進するため、地域連携ネットワークの構築やクリニカルパスなどを学修する。地域の病院や医師との連携推進、患者中心の「かかりつけ医」との病病/病診連携を含め医療の地域連携について知ることから学ぶ。	
		チーム医療と臨床検査	病院などの医療施設では、直接診療に携わる医師や看護師、さらに薬剤師、臨床検査技師、診療放射線技師などの医療部門と、それらを支える事務部門など多くの職種が関わっている。そのため、より質の高い医療を提供するには、チーム医療を意識することが重要である。チーム医療とは、各職種のスタッフがお互いの専門性を活かし、最大限能力を発揮することによって、患者にとってより良い診断や治療を行うことが目的である。チーム医療が求められる現代において、臨床検査技師が果たすべき役割について広い視野から学修する。 (オムニバス方式/全8回) (16 宮本 篤/1回) チーム医療概要、(5 梅森 祥央/1回) 栄養サポートチーム、(9 林 泰弘/2回) 糖尿病療養指導チーム、輸血療法チーム、(③小池 祐史/1回) 感染制御チーム、(④磯辺 正道/3回) 救急医療チーム、DMAT、医療安全管理チーム	オムニバス方式
専門基礎教育科目	医療工学及び情報科学	情報科学	臨床検査領域は、他の医療分野に先んじて情報技術の活用が進められており、コンピュータを利用した検査や精度管理などの業務を行うことが一般的となっている。その他の医療分野においてもコンピュータの活用が進められており、医療における高度な情報化に対応するために情報科学を学ぶことは必須である。本科目では、臨床検査技師として求められるコンピュータの原理と構造、ハードウェア、ソフトウェア、ネットワーク、システム開発方法、医療情報システム、セキュリティ等についての基礎を理解し、それらの知識を自身で使いこなせる情報リテラシーの修得を目指す。また、医療の質と安全を高めるために取り入れられている情報技術の導入における現状と課題、今後の技術動向についても学修し、俯瞰的な視野を持った医療者になるための基礎理解を目指す。	
		情報科学演習	本科目は、医療分野における情報科学の基礎的な原理を理解したうえで、臨床検査領域における業務へのコンピュータを活用した情報科学的な発想や検査データなどをもとに行われるデータサイエンス及びその解析結果を発表するための素養を高めることを目指す。実際にコンピュータを活用し、各種情報を扱うための理論、技術について、演習やグループワークを通じて学ぶこととし、ワードソフト、表計算ソフト、プレゼンテーションソフト等の利用方法を修得するとともに、学んだ理論と実践の往還により知識を深化させることを目指す。また、インターネットによる情報検索が業務において必須となっている現状から、演習を通じて情報セキュリティ、情報倫理等を学び、情報化社会における仕組みやリスクを理解する。	
		医用工学	医用機器の多くは電気を電気エネルギーとして使用している。しかし、生体の電氣的な特性を利用した医用治療機器もあり、臨床検査技師としてそれら基盤となる電気工学の知識は必須である。本講義では、直流回路、交流回路、電気エネルギー、電磁気学、インピーダンス素子、過渡現象について学修し、専門分野の理解を深めるための基礎知識を養う。	
		医用工学実習	医用機器の多くは電気を電気エネルギーとして使用している。しかし、生体の電氣的な特性を利用した医用治療機器もあり、臨床検査技師としてそれら基盤となる電気工学の知識は必須である。本実習では、医用工学の講義をもとに電気回路について学修し、専門分野の理解を深めるための基礎知識を養う。	共同

<p style="text-align: center;">専門教育科目</p> <p style="text-align: center;">臨床病態学</p>	臨床検査医学総論 I	<p>本科目では、各疾患の分類、原因や病態、治療、経過、さらに各疾患に対する臨床検査の種類、意義、役割を理解し、総合的に考えることができる能力を身につける。臨床検査医学総論 I では、循環器疾患、呼吸器疾患、消化器疾患、肝/胆/膵疾患、感染症、血液・造血器疾患、内分泌疾患、腎/尿路/男性生殖器疾患について学ぶ。将来、臨床の現場で医師や他職種とコミュニケーションを図り、チーム医療として患者の診断や治療において臨床検査の選択や結果解釈などに貢献できる臨床検査技師を目指すことにつなげる。</p>	
	臨床検査医学総論 II	<p>本科目では、各疾患の分類、原因や病態、治療、経過、さらに各疾患に対する臨床検査の種類、意義、役割を理解し、総合的に考えることができる能力を身につける。臨床検査医学総論 II では、女性生殖器疾患、神経/運動器疾患、アレルギー性疾患/膠原病/免疫不全症、代謝/栄養障害、感覚器疾患、中毒、染色体/遺伝子異常症、皮膚および乳腺の疾患について学ぶ。将来、臨床の現場で医師や他職種とコミュニケーションを図り、チーム医療として患者の診断や治療において臨床検査の選択や結果解釈などに貢献できる臨床検査技師を目指すことにつなげる。</p>	
	症例細胞診検査学	<p>本科目では、各専門領域における Reversed ClinicaPathological Conference (R-CPC) を通じて、臨床検査学の総括的な知識の理解を深めることを目的とする。R-CPC とは、症状や診察所見などの患者情報がない状況下で、臨床検査データをもとに、そこから病態を追求し、鑑別診断へと導く症例検討であり、検査項目の特徴や意義を深く学ぶことができる臨床検査医学の学修方法である。細胞診検査学を中心とした症例をもとに、臨床検査データの読み方、考え方を学ぶ。</p>	共同
	症例血液・染色体検査学	<p>本科目では、各専門領域における Reversed ClinicaPathological Conference (R-CPC) を通じて、臨床検査学の総括的な知識の理解を深めることを目的とする。R-CPC とは、症状や診察所見などの患者情報がない状況下で、臨床検査データをもとに、そこから病態を追求し、鑑別診断へと導く症例検討であり、検査項目の特徴や意義を深く学ぶことができる臨床検査医学の学修方法である。血液・染色体検査学を中心とした症例をもとに、臨床検査データの読み方、考え方を学ぶ。</p>	
	症例微生物・感染制御学	<p>本科目では、各専門領域における Reversed ClinicaPathological Conference (R-CPC) を通じて、臨床検査学の総括的な知識の理解を深めることを目的とする。R-CPC とは、症状や診察所見などの患者情報がない状況下で、臨床検査データをもとに、そこから病態を追求し、鑑別診断へと導く症例検討であり、検査項目の特徴や意義を深く学ぶことができる臨床検査医学の学修方法である。微生物・感染制御学を中心とした症例をもとに、臨床検査データの読み方、考え方を学ぶ。</p>	共同
	症例臨床化学・免疫検査学	<p>本科目では、各専門領域における Reversed ClinicaPathological Conference (R-CPC) を通じて、臨床検査学の総括的な知識の理解を深めることを目的とする。R-CPC とは、症状や診察所見などの患者情報がない状況下で、臨床検査データをもとに、そこから病態を追求し、鑑別診断へと導く症例検討であり、検査項目の特徴や意義を深く学ぶことができる臨床検査医学の学修方法である。臨床化学・免疫検査学を中心とした症例をもとに、臨床検査データの読み方、考え方を学ぶ。</p>	共同

専門教育科目	臨床病態学	症例輸血検査学	本科目では、各専門領域における Reversed ClinicaPathological Conference (R-CPC) を通じて、臨床検査学の総括的な知識の理解を深めることを目的とする。R-CPC とは、症状や診察所見などの患者情報がない状況下で、臨床検査データをもとに、そこから病態を追求し、鑑別診断へと導く症例検討であり、検査項目の特徴や意義を深く学ぶことができる臨床検査医学の学修方法である。輸血検査学を中心とした症例をもとに、臨床検査データの読み方、考え方を学ぶ。	共同
		症例超音波検査学	本科目では、各専門領域における Reversed ClinicaPathological Conference (R-CPC) を通じて、臨床検査学の総括的な知識の理解を深めることを目的とする。R-CPC とは、症状や診察所見などの患者情報がない状況下で、臨床検査データをもとに、そこから病態を追求し、鑑別診断へと導く症例検討であり、検査項目の特徴や意義を深く学ぶことができる臨床検査医学の学修方法である。超音波検査学を中心とした症例をもとに、臨床検査データの読み方、考え方を学ぶ。	共同
		臨床検査総論演習	専門科目の講義、実習および臨地実習で学んだ知識、および臨床検査学の基本的内容に加え、疾患と臨床検査との関係などが身についているか総合的に再確認する。具体的には、臨床検査学の専門科目である臨床病態学、病理・細胞検査学、臨床血液学、臨床検査総論、臨床化学、臨床微生物学、臨床免疫学、輸血検査学、臨床生理学、公衆衛生学、医用工学について学修する。 (オムニバス方式/全 60 回) (①浅沼 広子 6 回) 臨床病態学、(6 徳永 祐一/6 回) 病理・細胞検査学、(8 高橋 裕之/6 回) 臨床血液学、(②澁谷 斉/6 回) 臨床検査総論、(5 梅森 祥央/6 回) 臨床化学、(1 品川 雅明/3 回) 臨床微生物学、(③小池 祐史/6 回) 臨床微生物学、公衆衛生学、医用工学、(10 魚住 諒/6 回) 臨床免疫・輸血検査学、(4 西田 睦/6 回) 臨床生理学、(④磯辺 正道/9 回) 公衆衛生学、医用工学、総合演習	オムニバス方式
	形態検査学	病理検査学	本科目では、病理学で学んだ各疾患を病理診断するための病理検査学について修得することを目的とする。具体的には、病理組織標本の作製過程である固定、包埋、薄切、染色などのそれぞれの目的、原理、使用試薬、操作手技、結果の解釈などの基礎を学び、さらに疾患別に必要な特殊染色や免疫染色について総合的に学修し、病理診断において必要とされる標本作製の技術を身につけることにつなげる。	
		細胞検査学	本科目では、細胞診の正しい標本作製法に加え、各臓器・各領域に出現する細胞の特徴を理解し、正常細胞・良性および悪性細胞の違いに関する知識を修得することを目的とする。標本作製においては、検体の採取方法、塗抹法、固定法および各種染色方法について、また、婦人科領域、呼吸器領域、消化器領域、泌尿器領域、体腔液、脳脊髄液、穿刺液および非上皮性腫瘍における、細胞診スクリーニング方法や細胞判定区分と細胞診断について学修する。	
		病理検査学実習	本科目では、病理検査学で学んだ病理組織標本の作製過程(固定、包埋、薄切、染色)それぞれの目的、原理、使用試薬、操作手技、結果の解釈などの基礎的な知識をもとに、実習をとおして実際に組織標本作製に必要な基本的技術を身につけることを目的とする。具体的には、包埋ブロックの作製、薄切、基本染色法である HE (ヘマトキシリン・エオジン) 染色や代表的な特殊染色法を行い、精度の高い標本作製技術の修得につなげる。	共同



専門教育科目	形態検査学	細胞検査学実習	本科目では、細胞検査学で学んだ、細胞診の正しい標本作製法、各臓器・各領域に出現する細胞の特徴などの基本的知識をもとに、実習をととして実際に細胞診の標本作製、さらに各領域の標本を用いて、スクリーニング方法、正常、異常細胞の見方・捉え方など細胞診検査における基本的技術を身につけることを目的とする。具体的には、婦人科領域、呼吸器領域、消化器領域、泌尿器領域、体腔液、脳脊髄液、中枢神経系、穿刺液、非上皮性腫瘍の各領域における、精度の高い標本作製技術の修得につなげる。	共同
		臨床血液学Ⅰ	血液疾患を修得するには、各血液成分と機能、産生と崩壊などのメカニズムを理解することが重要である。また、血液検査は、貧血、白血病、出血傾向など血液疾患の病態解析、診断、治療効果判定、治療経過観察など日常診療において欠く事のできない検査である。本科目では基本となる臨床血液検査学に関する基礎的知識を修得し、血球成分（赤血球、白血球、血小板）、止血機構、凝固・線溶系、の各検査方法や検査目的を学修する。	
		臨床血液学Ⅱ	血液疾患を修得するには、各血液成分と機能、産生と崩壊などのメカニズムを理解することが重要である。また、血液検査は、貧血、白血病、出血傾向など血液疾患の病態解析、診断、治療効果判定、治療経過観察など日常診療において欠く事のできない検査である。本科目では、臨床血液検査学Ⅰで学んだ知識を元に、血液の量的、質的異常を理解し、血液検査において明らかになりうる血液疾患を学び、各疾患の検査結果や病態を学修する。	
		臨床血液学実習Ⅰ	現在、血球計数測定は自動化され検査が行われている。用手法による血球数算定は、測定法の基本的な原理や目的を理解する上で重要である。臨床血液学実習Ⅰでは、臨床血液学Ⅰで学んだ知識をもとに血球に関する検査に必要な技術を修得する。具体的には、白血球、赤血球、血小板、網状赤血球数の算定、およびヘマトクリット値、ヘモグロビン濃度などの測定方法、基準値、結果の解釈について学ぶ。	共同
		臨床血液学実習Ⅱ	末梢血白血球分類における形態学的検査は、現在、自動化されているが充分とは言えず、目視による確認が行われている。臨床血液学実習Ⅱでは、臨床血液学ⅠおよびⅡで学んだ知識をもとに、塗抹標本作製法を学び、普通染色、特殊染色の技術を修得し、血球の分類、骨髓塗抹標本の観察方法、血液細胞抗原検査について学修する。さらに、現在、自動化により検査が行われている凝固検査においては、用手法を行うことで測定法の基本的な原理や目的を理解し、凝固検査に必要な検査技術を修得する。	共同
		病理検査学総合演習	臨地実習に入る前に、これまで学内にて講義や実習等で学んだ病理検査学の修得状況の再確認、さらに実際の臨床現場で実施されている病理検査法、細胞検査法について、総括的な知識と技術の理解を深める。臨地実習の予備学修的内容でもあり、医療現場における臨床検査と臨床検査技師の役割や責任を学修するうえで、より円滑に進め、意義の高い実習にすることを目的とする。また、手技および技術的な再確認である「臨床検査学基礎実習」への理解にもつなげる。	
		血液検査学総合演習	臨地実習に入る前に、これまで学内にて講義や実習等で学んだ血液検査学の修得状況の再確認、さらに実際の臨床現場で実施されている血液検査法、染色体検査法について、総括的な知識と技術の理解を深める。臨地実習の予備学修的内容でもあり、医療現場における臨床検査と臨床検査技師の役割や責任を学修するうえで、より円滑に進め、意義の高い実習にすることを目的とする。また、手技および技術的な再確認である「臨床検査学基礎実習」への理解にもつなげる。	

<p style="writing-mode: vertical-rl; text-orientation: upright;">専門教育科目</p> <p style="writing-mode: vertical-rl; text-orientation: upright;">生物化学分析検査学</p>	一般検査学 I	<p>一般検査は、血液以外の検査材料を扱う検査であり、検査項目は尿定性検査、尿化学検査（尿定量検査）、尿沈渣検査、髄液検査、糞便検査、穿刺液検査、精液検査など多岐にわたる。そこで、本科目では、ヒトから採取または排出される血液以外の検体（尿、糞便、脳脊髄液、喀痰、胃液、十二指腸液、穿刺液、精液、その他の体液）について、基礎知識、検体の採取法、取り扱い方、一般的性状、検査法や臨床的意義について学ぶことを目的とする。一般検査学 I では、尿について学修する。</p>	
	一般検査学 II	<p>一般検査学は、血液以外の検査材料を扱う検査であり、検査項目は尿定性検査、尿化学検査（尿定量検査）、尿沈渣検査、髄液検査、糞便検査、穿刺液検査、精液検査など多岐にわたる。そこで、本科目では、ヒトから採取または排出される血液以外の検体（尿、糞便、脳脊髄液、喀痰、胃液、十二指腸液、穿刺液、精液、その他の体液）について、基礎知識、検体の採取法、取り扱い方、一般的性状、検査法や臨床的意義について学ぶことを目的とする。一般検査学 II では、糞便、脳脊髄液、喀痰、胃液、十二指腸液、穿刺液、精液、その他の体液について学修する。</p>	
	一般検査学実習	<p>一般検査学実習は、「一般検査学 I、II」で学修した一般検査領域の各種検査材料について、検査を実施し、得られた結果について解釈し、それらの特徴や問題点を認識することを目的とする。ここでは、尿検査の基本である尿定性検査の実際を実習し、さらに尿沈渣検査を併せて結果を解釈することで、生体内での事象を解析する。さらに糞便検査や脳脊髄液検査についても同様に検査技法を修得する。</p>	共同
	臨床化学 I	<p>臨床化学は、血液や尿に含まれる物質を精密かつ正確に定量測定することで、診療においては、各種疾病の診断や治療のモニタリング、そして健康管理のための健康診断に大きく貢献する学問である。本科目では、総論として、臨床化学分析で用いる単位や標準物質、測定値の管理法、基準範囲や臨床判断値について、さらに、各論として実際の検査室で用いられている様々な検査手法を学び、その原理を修得することで検査法の特徴や問題点を考察する。</p>	
	臨床化学 II	<p>臨床化学は、血液や尿に含まれる物質を精密かつ正確に定量測定することで、診療においては、各種疾病の診断や治療のモニタリング、そして健康管理のための健康診断に大きく貢献する学問である。本科目では、検査室で通常用いられている各種検査項目について、その物質の代謝や疾患での挙動を知ることによって診断や治療に直結することを理解するとともに、それらの項目ごとの分析法を理解する。 各種検査値から生体内で起こっている変化を推測する。</p>	
	臨床化学実習 I	<p>臨床化学実習は、「臨床化学 I」および「臨床化学 II」で学修した各種臨床生化学検査項目の主要な方法を実際に試薬調整から検体準備、検査、検査結果の導きだしとその解釈について一連の流れを実習を通して身に付けることで、それらの特徴や問題点を認識することを目的とする。臨床化学実習 I では、検体準備としての採血から生化学検査の基礎となる検体の適切性を意識した実際の電解質や糖質などの基本的な検査を学ぶ。</p>	共同
	臨床化学実習 II	<p>臨床化学実習は、「臨床化学 I」および「臨床化学 II」で学修した各種臨床生化学検査項目の主要な方法を実際に試薬調整から検体準備、検査、検査結果の導きだしとその解釈について一連の流れを実習を通して身に付けることで、それらの特徴や問題点を認識することを目的とする。臨床化学実習 II では、脂質や酵素などのさまざまな生化学検査を実施することで臨床化学領域の知識を修得する。</p>	共同

専門教育科目	生物化学分析検査学	遺伝子・染色体検査学	<p>近年の医学の急速な発展に伴い、染色体・遺伝子レベルによる病態解析や様々な検査に応用されるようになり、遺伝子検査学および染色体検査学は、今や臨床医学に欠かせない重要な存在になっている。本科目では、急速に発展する遺伝子・染色体検査学について、確実に理解できることを目的とする。具体的には、遺伝子の基礎、遺伝子異常と疾患、遺伝子検査法、染色体の基礎、染色体異常と疾患、染色体の検査法、遺伝子・染色体検査における倫理について学修する。</p> <p>(オムニバス方式/全8回)</p> <p>(8 高橋 裕之/6回) 遺伝子の基礎、遺伝子異常と疾患、染色体の基礎、染色体異常と疾患、染色体の検査法、遺伝子・染色体検査における倫理、(1 品川 雅明 2回) 遺伝子検査法</p>	オムニバス方式
		遺伝子検査学実習	<p>近年の医学の急速な発展に伴い、染色体・遺伝子レベルによる病態解析や様々な検査に応用されるようになり、遺伝子検査学および染色体検査学は、今や臨床医学に欠かせない重要な存在になっている。本科目では、講義で学んだ遺伝子・染色体検査学をもとに、実習を行う。具体的には、確実に理解できることを目的とする。具体的には、遺伝子の基礎、遺伝子異常と疾患、遺伝子検査法、染色体の基礎、染色体異常と疾患、染色体の検査法、遺伝子・染色体検査における倫理について学修する。</p>	共同
		一般検査学総合演習	<p>臨地実習に入る前に、これまで学内にて講義や実習等で学んだ一般検査学の修得状況の再確認、さらに実際の臨床現場で実施されている一般検査法について、一般検査学の総括的な知識と技術の理解を深める。臨地実習の予備学修の内容でもあり、医療現場における臨床検査と臨床検査技師の役割や責任を学修するうえで、より円滑に進め、意義の高い実習にすることを目的とする。また、手技および技術的な再確認である「臨床検査学基礎実習」への理解にもつなげる。</p>	
		分析検査学総合演習	<p>臨地実習に入る前に、これまで学内にて講義や実習等で学んだ分析（臨床化学、遺伝子）検査学の修得状況の再確認、さらに実際の臨床現場で実施されている分析（臨床化学、遺伝子）検査法について、分析（臨床化学、遺伝子）検査学の総括的な知識と技術の理解を深める。臨地実習の予備学修の内容でもあり、医療現場における臨床検査と臨床検査技師の役割や責任を学修するうえで、より円滑に進め、意義の高い実習にすることを目的とする。また、手技および技術的な再確認である「臨床検査学基礎実習」への理解にもつなげる。</p>	
	病因・生体防御検査学	医動物学	<p>本科目では、寄生虫や原虫の分類、形態、感染経路、病態および検査法について学修する。寄生虫や原虫による疾患は、国内では減少傾向にあるが、世界的には決して減っているわけではない。グローバル化が進み、海外旅行者や長期赴任者、移民や難民などが増加する可能性があるなかで、寄生虫や原虫による疾患はないがしろにできない疾患である。また、野生動物や家畜、ペットなどとの共通病原性あるいは宿主特異性をもった人獣（畜）共通感染症も多いため、確実に検出できる能力を身につける。</p>	
微生物学		<p>微生物の性状や特徴の基礎およびヒトに対する感染症の関連性について学ぶ。具体的には、細菌の形態と構造、細菌の代謝と発育、染色法と観察法、細菌の発育と培養、同定法、遺伝・変異と遺伝子診断、滅菌および消毒、抗菌薬、病原性と抵抗力、医療関連感染と感染症法などの微生物に関する基礎的内容について学修し、臨床微生物学の理解につなげる。</p>		

専門教育科目 病因・生体防御検査学	臨床微生物学Ⅰ	<p>感染症は、病原微生物がヒトの体内に侵入し、感染することによって起こる病気であり、病原微生物には細菌、真菌、ウイルスなどが存在する。臨床微生物学Ⅰでは、そのうち細菌によって起こる感染症について、感染と発症、感染様式（感染経路）、病院感染症（院内感染）、抗菌化学療法と薬剤耐性、微生物検査の基礎知識、微生物同定と感受性検査、感染症免疫検査について学修する。</p> <p>（オムニバス方式/全8回）</p> <p>（1品川 雅明/3回）グラム陽性球菌1、グラム陽性球菌2、グラム陽性球菌3、グラム陰性らせん菌、グラム陽性桿菌、抗酸菌、その他の細菌、（③小池 祐史/5回）グラム陰性球菌、球桿菌、グラム陰性桿菌1、グラム陰性桿菌2、グラム陰性桿菌3、グラム陰性桿菌4、グラム陰性桿菌5、偏性嫌気性菌1、偏性嫌気性菌2</p>	オムニバス方式
	臨床微生物学Ⅱ	<p>感染症は、病原微生物がヒトの体内に侵入し、感染することによって起こる病気であり、病原微生物には細菌、真菌、ウイルスなどが存在する。臨床微生物学Ⅱでは、そのうち真菌、ウイルスによって起こる感染症について、感染と発症、感染様式（感染経路）、病院感染症（院内感染）、抗菌化学療法と薬剤耐性、微生物検査の基礎知識、微生物同定と感受性検査、感染症免疫検査について学修する。</p>	
	臨床微生物学実習Ⅰ	<p>微生物学、臨床微生物学Ⅰ・Ⅱの講義で得た知識を活用し、無菌操作、グラム染色や特殊染色、各種培地の作成、分離培養法、各種同定検査法、薬剤感受性試験法、耐性菌検出法について学ぶことを目的とする。臨床微生物学実習Ⅰでは、グラム陽性菌、グラム陰性菌、抗酸菌、真菌のうち特に臨床材料から分離されやすい主要な微生物を用いて実習する。</p>	共同
	臨床微生物学実習Ⅱ	<p>微生物学、臨床微生物学Ⅰ・Ⅱの講義で得た知識を活用し、実践的に材料別の微生物検査法について学ぶことを目的とする。各種材料から原因微生物を特定するには、材料中に存在する常在菌叢の説明と原因となる微生物を知っておく必要がある。その知識をもとに、培地の種類を選択し、必要な条件で培養検査を行わなければ、原因微生物の特定にはつながらない。そこで、臨床微生物学実習Ⅱでは、各種材料と感染症との関連性、および検査法について、実習する。</p>	共同
	臨床免疫学Ⅰ	<p>本科目では、専門基礎分野で履修した「免疫学」の内容から一層深く免疫系について学び、免疫学的検査を理解、実践するために必要な基礎知識を修得することを目的とする。臨床免疫学Ⅰでは、免疫学的検査の原理として、試験管内での抗原抗体反応、沈降反応、凝集反応、溶解反応、補体結合反応、中和反応や免疫科学的分析法の基礎的内容、各種疾患と免疫系、さらにその検査法について講義し、理解を深める。</p>	
	臨床免疫学Ⅱ	<p>臨床免疫学Ⅱでは、これまでに履修した「免疫学」「臨床免疫学Ⅰ」の内容をさらに発展させ、免疫学的検査が有用な疾患に対する各種免疫学的検査法の原理や方法について学び、免疫検査学実習に繋げる。また、近年リウマチ等自己免疫疾患や造血器腫瘍の治療を対象に発達している生物学的製剤や、ノーベル賞を受賞した免疫チェックポイント阻害剤の効果機序についても講義を行い、免疫に関連する最新の知見を得る。</p>	
	臨床免疫学実習Ⅰ	<p>現代における臨床検査は著しく機械化が進んでおり、用手法で行われる検査は減少している。しかしそのなかでも免疫学的検査は未だ用手法が多く残る分野である。また、自動化され機械で測定する検査であっても、その測定原理や方法を理解しておかなくては正しい結果を得られない。本実習では免疫検査の基本技術、沈降反応、電気泳動法、イムノクロマトグラフィ法についてを学び、病院での臨床実習に繋げるとともに、現場で働く臨床検査技師として必要な知識や技術を修得する。</p>	共同

専門教育科目	病因・生体防御検査学	臨床免疫学実習Ⅱ	現代における臨床検査は著しく機械化が進んでおり、用手法で行われる検査は減少している。しかしそのなかでも免疫学的検査は未だ用手法が多く残る分野である。また、自動化され機械で測定する検査であっても、その測定原理や方法を理解しておかなくては正しい結果を得られない。本実習では、自己抗体、凝集反応、フローサイトメトリー法、補体価について学び、病院での臨床実習に繋げるとともに、現場で働く臨床検査技師として必要な知識や技術を修得する。	共同
		輸血・移植検査学	輸血療法は患者救命、あるいは QOL の維持向上のためになくなくてはならない治療法である。しかし同時に輸血療法はリスクを伴う治療法であり、実施に際しては投与する製剤の種類や投与量を慎重に見極める必要があり、その決定において臨床検査技師の果たす役割は非常に大きい。輸血・移植検査学では輸血療法および関連する検査に関する正しい知識を修得する。また、近年増加する移植医療に関連する免疫機構と検査、さらに再生医療等製品についても学ぶ。	
		輸血検査学実習	実習を主体に一部講義を交えて行う。輸血・移植検査学で学んだ内容を基に実習を行い、座学のみでは得られなかった経験によって知識の補完を行う。輸血用血液製剤は検査後すぐに患者の体内へと輸注されるため、万が一検査結果に誤りがあった場合患者へと与える影響が非常に大きい。輸血検査学実習を通じ、ミスの起こりにくい検査の進め方や報告方法も学び、病院での臨地実習及びその先へ繋がる知識や技術を修得する。	共同
		微生物検査学総合演習	臨地実習に入る前に、これまで学内にて講義や実習等で学んだ微生物検査学の修得状況の再確認、さらに実際の臨床現場で実施されている微生物検査法について、微生物検査学の総括的な知識と技術の理解を深める。臨地実習の予備学修的内容でもあり、医療現場における臨床検査と臨床検査技師の役割や責任を学修するうえで、より円滑に進め、意義の高い実習にすることを目的とする。また、手技および技術的な再確認である「臨床検査学基礎実習」への理解にもつなげる。	
		免疫検査学総合演習	臨地実習に入る前に、これまで学内にて講義や実習等で学んだ免疫検査学の修得状況の再確認、さらに実際の臨床現場で実施されている免疫検査法について、免疫検査学の総括的な知識と技術の理解を深める。臨地実習の予備学修的内容でもあり、医療現場における臨床検査と臨床検査技師の役割や責任を学修するうえで、より円滑に進め、意義の高い実習にすることを目的とする。また、手技および技術的な再確認である「臨床検査学基礎実習」への理解にもつなげる。	
	生理機能検査学	臨床生理学Ⅰ	本科目では、主に画像検査について学修する。超音波検査は、非侵襲的に人体の臓器や組織を画像化することができ、比較的手軽に実施することができる。ただし、良好な超音波画像を得るには、経験により技術を修得することが必要である。臨床生理学Ⅰでは、超音波検査の基本原則(超音波の性質、装置の特色、ドブラ法、アーチファクト等)を学修した後、体表、血管、心臓領域の超音波において、各臓器の解剖学的知識を身に付け、形態、動き、血流の観察といったより実践的な理解を目指す。	

専門教育科目  生理機能検査学	臨床生理学Ⅱ	<p>本科目では、主に心電図検査、神経・筋機能検査について学修する。</p> <p>心電図検査は、病院での診察や健康診断の際に施行される一般的な検査である。非侵襲的で短時間な検査であるにも関わらず、多くの情報を得ることができる。また、医用電子工学の発達に伴い、心電計はデジタル化・軽量化・多機能化しており、これらの基礎を学ぶことは臨床検査技師として必要不可欠である。心電図の基礎を固めた上で、様々な心電図波形を紹介し、その波形の成り立ちを学修する。</p> <p>神経検査の一つである脳波検査は、リアルタイムな脳機能の評価に適しており、覚醒や睡眠の状態、脳の機能障害を非侵襲的に行う検査である。年齢や覚醒状態、様々なアーチファクト等の注意点を考慮した正しい判読法について学修する。</p> <p>誘発電位や筋電図検査に関しては、解剖およびそれに伴う生理学的基礎知識を身に付け、波形の成り立ちを理解し、疾患による波形の違いを学ぶ。</p>	
	臨床生理学Ⅲ	<p>本科目では、主に脈波、心音図検査、心電図検査、呼吸器系検査、味覚・嗅覚・平衡覚・聴覚などの感覚器に関する検査について学修する。</p> <p>心電図検査では、臨床でよく経験する波形を中心に紹介し、判読法について学修する。</p> <p>呼吸器系検査は、呼吸器系の役割（換気機能、呼吸機能）と血液ガス交換のしくみ（酸塩基平衡、代謝）を理解する必要がある、その基礎や各検査法を学修する。また、閉塞性肺疾患や拘束性肺疾患等の病態による検査結果の解釈を学ぶ。</p> <p>感覚器に関する検査は、器官の構造を熟知した上で検査法や原因となる感覚器疾患について学修する。</p>	
	臨床生理学Ⅳ	<p>本科目では、主に画像検査について学修する。</p> <p>超音波検査は、非侵襲的に人体の臓器や組織を画像化することができ、比較的手軽に実施することができる。ただし、良好な超音波画像を得るには、経験により技術を修得することが必要である。臨床生理学Ⅳでは、腹部領域の超音波において、各臓器の解剖学的知識を身に付け、形態、動き、血流の観察といったより実践的な理解を目指す。</p> <p>また、MRI に関しては基本的な撮像方法を学修し、臓器別の正常画像および異常画像の判読を行う。</p>	
	認知症検査概論	<p>認知症の増加は社会的な問題であり、認知症の早期発見や予防が重要である。本科目では、認知症の病態を理解し、認知症に対する臨床検査の内容と手技について学ぶことを目的とする。具体的な認知症検査は、神経心理学的検査、画像検査、脳脊髄液検査、血液検査、神経生理学的検査、血管検査、循環器検査、NIRS 検査、嗅覚検査、睡眠検査について学ぶ。</p>	
	臨床生理学実習Ⅰ	<p>臨床生理学実習Ⅰでは、超音波検査、脳波検査、筋電図検査、誘発電位検査、心電図検査の実習を行う。生理検査は、直接患者と接し検査を進めるため、患者の協力が不可欠である。患者には、理解しやすく分かりやすい説明を行い、適切に機器を操作し、可能な限り短時間で検査を進めることが重要である。また、得られたデータの臨床的意義を理解し、医師に伝えることも必要不可欠である。本実習では、機器の取り扱いや検査法を学び、得られたデータを評価することで、医療現場でも役立つ技術と能力を修得することを目的としている。</p>	共同

専門教育科目	生理機能検査学	臨床生理学実習Ⅱ	臨床生理学実習Ⅱでは、超音波検査、呼吸機能検査、感覚機能検査、心音図検査、脈波検査、心電図検査の実習を行う。生理検査は、直接患者と接し検査を進めるため、患者の協力が不可欠である。患者には、理解しやすく分かりやすい説明を行い、適切に機器を操作し、可能な限り短時間で検査を進めることが重要である。また、得られたデータの臨床的意義を理解し、医師に伝えることも必要不可欠である。本実習では、機器の取り扱いや検査法を学び、得られたデータを評価することで、医療現場でも役立つ技術と能力を修得することを目的としている。	共同
		生理機能検査学総合演習	臨地実習に入る前に、これまで学内にて講義や実習等で学んだ生理検査学の修得状況の再確認、さらに実際の臨床現場で実施されている生理検査法について、生理検査学の総括的な知識と技術の理解を深める。臨地実習の予備学修的内容でもあり、医療現場における臨床検査と臨床検査技師の役割や責任を学修するうえで、より円滑に進め、意義の高い実習にすることを目的とする。また、手技および技術的な再確認である「臨床検査学基礎実習」への理解にもつなげる。	
	検査総合管理学	検査機器総論演習Ⅰ	臨床検査では様々な機器が用いられており、正確な検査結果を提供するには正しく使いこなすことが重要である。そこで、検査機器総論演習Ⅰでは、臨床検査学実習に入る前に、単位や濃度計算法の復習、および分析等に一般的に利用される各種器具について、原理、構造、使用目的、使用上の注意点などについて学び、正しい操作方法を学修する。各種器具を正しく、さらに安全に使用するための知識と技術を身につけることで、精度の高い検査を実践するための基礎につなげる。 (オムニバス方式/全15回) (②澁谷 斉、5梅森 祥央/8回) 単位、濃度計算、化学容量器、測光装置、電気化学装置 (1品川 雅明、6徳永 祐一/7回) 秤量装置、遠心分離装置、恒温装置、保冷装置、純水装置、顕微鏡装置	オムニバス方式・共同
		検査機器総論演習Ⅱ	臨床検査では様々な機器が用いられており、正確な検査結果を提供するには正しく使いこなすことが重要である。そこで、検査機器総論演習Ⅱでは、臨床検査学実習に入る前に、各分野の主な測定装置や自動測定機器について、原理、構造、使用目的、使用上の注意点などについて学び、正しい操作方法を学修する。測定装置や自動測定機器を正しく、さらに安全に使用するための知識と技術を身につけることで、精度の高い検査を実践するための基礎につなげる。 (オムニバス方式/全15回) (8高橋 裕之/2回) 血液検査装置、(5梅森 祥央/4回) 生化学検査装置Ⅰ、生化学検査装置Ⅱ、POCT、(10魚住 諒/2回) 免疫検査装置、(1品川 雅明/1回) 微生物検査装置Ⅰ、(③小池 祐史/2回) 微生物検査装置Ⅱ、(①浅沼 広子/2回) 病理検査装置、(4西田 睦/2回) 生理検査装置	オムニバス方式

専門教育科目 検査総合管理学	専門検査技師総論	<p>臨床検査技師は国家資格であるが、さらに専門分野を極めスキルアップを図る目的から、各種認定資格が存在する。これは、専門学会等によって制度化されており、多種多様なものが存在する。本科目では、現在、臨床検査技師が取得可能な認定制度を解説し、将来、臨床検査技師として仕事する際の、資質の向上および生涯教育の充実でもある認定制度とその役割について理解することを目的とする。</p> <p>(オムニバス方式/全8回)</p> <p>(①浅沼 広子/1回) 病理検査領域の認定資格、(8 高橋 裕之/2回) 血液検査領域の認定資格、移植検査領域の認定資格、(5 梅森 祥央/1回) 臨床化学・免疫・検査および検査管理領域の認定資格、(9 林 泰弘/1回) 輸血検査領域の認定資格、(③小池 祐史/1回) 微生物検査領域の認定資格、(4 西田 睦/1回) 生理検査領域の認定資格、(45 太田 惣/1回) 一般検査領域の認定資格</p>	オムニバス方式
	臨床検査管理学Ⅰ	<p>臨床検査管理学は、臨床検査の成り立ちと現在の各組織における検査部門の体制などを学び、正しい管理体制を構築したうえで、検査の依頼者に対して正確な検査結果を提供できるよう運営管理の側面から確立された学問である。臨床検査管理学Ⅰでは、検査部門の組織のありかた、検査の一連の流れを理解する。</p> <p>(オムニバス方式/全8回)</p> <p>(④磯辺 正道/7回) 臨床検査の意義、検査管理の概念、臨床検査体制の変遷と検査部門の組織、検査部門の管理1、検査部門の管理2、検査の受付から報告1、検査の受付から報告2、(6 徳永 祐一/1回) ISO15189 の概要</p>	オムニバス方式
	臨床検査管理学Ⅱ	<p>臨床検査管理学は、臨床検査の成り立ちと現在の各組織における検査部門の体制などを学び、正しい管理体制を構築したうえで、検査の依頼者に対して正確な検査結果を提供できるよう運営管理の側面から確立された学問である。臨床検査管理学Ⅱでは、精度管理の考え方や得られた検査結果をどのように活用するかを学ぶとともに、臨床検査全般にわたる生涯教育について理解する。</p> <p>(オムニバス方式/15回)</p> <p>(5 梅森 祥央/8回) 精度管理の概要と標準化、測定法の信頼性評価、精度管理法の実際、精度管理に必要な統計学、検査情報の判断基準1、検査情報の判断基準2、検査情報の活用、生涯教育(42 志保 裕行/7回) 標準化で求められる精度保証の概念、精度保証に関わる要因、ISO 15189 で使う統計学Ⅰ、ISO 15189 で使う統計学Ⅱ、分散分析法、測定の不確かさ、臨床検査室と ISO 15189</p>	オムニバス方式
	臨床検査マネジメント論	<p>臨床検査のマネジメントは、臨床検査分野を幅広く理解し技術と知識を学修することが必要である。臨床検査全般を概観できるようになる知識をはじめ、医療の質の評価、検査データの解析・評価など客観性を持ち管理することを学修する。マネジメントは組織の経営や運営を学び、将来、臨床検査部の技師長や部長等の管理者、診療技術部長や病院管理者を目指す人材を育みたい。</p>	
	関係法規	<p>本科目では、臨床検査技師が仕事をするうえで知っておかなければいけない、法律について、医事法規、臨床検査技師等に関する法律、医療・保健・福祉概説、臨床検査と医療過誤など、我が国の臨床検査技師に関連する法律について学修する。さらに、血液等を患者から採取する諸条件や人体を検体とする生理検査実施時の諸注意事項についても学修する。</p>	



専門教育科目	検査総合管理学	臨床検査総合実習	<p>臨地実習に入る前に、これまで学内にて講義や実習等で学んだ臨床検査学各専門科目の手技および技術的な修得状況を再確認し、総合的な知識および理解を深める。臨地実習の予備学修的内容でもあり、医療現場における臨床検査と臨床検査技師の役割や責任を学修するうえで、より円滑に進め、意義の高い実習にすることを目的とする。本科目では、病理・細胞検査学、臨床血液学、一般検査学、臨床化学、遺伝子・染色体学、臨床微生物学、臨床免疫学、輸血・移植検査学、臨床生理学における、手技および技術的な再確認を行う。</p> <p>(オムニバス方式/全23回)</p> <p>(①浅沼 広子、6 徳永 祐一/3 回) 病理・細胞検査、(8 高橋 裕之、①浅沼 広子/3 回) 血液検査、(②澁谷 斉、6 徳永 祐一/3 回) 一般検査、(②澁谷 斉、5 梅森 祥央/3 回) 臨床化学検査、(1 品川 雅明、8 高橋 裕之、③小池 祐史/2 回) 遺伝子・染色体検査、(1 品川 雅明、③小池 祐史/3 回) 微生物検査、(10 魚住 諒、④磯辺 正道/2 回) 免疫検査、(10 魚住 諒、9 林 泰弘/1 回) 輸血・移植検査、(4 西田 睦、9 林 泰弘/3 回) 生理検査</p>	オムニバス方式・共同
	医療安全管理学	感染管理学	<p>病院内、地域における感染防止の管理システムや、医療関連感染を予防するための知識・技術、および我が国の感染症法について修得することを目的とする。臨床検査技師は各種検体や患者と接するため、病原体から感染しない、広げないための防止策を正しく理解することが必要である。具体的には、米国の CDC ガイドラインに基づき、スタンダードプリコーションの知識や感染防御具の正しい着用方法、検査業務における感染防止策について学ぶ。また、病院感染対策における臨床検査技師の役割や分子疫学的解析法・環境検査などの検査法についても学修する。</p> <p>(オムニバス方式/全8回)</p> <p>(④磯辺 正道/4 回) 感染管理の現状、関係法規感染予防策、洗浄・消毒・滅菌、医療廃棄物の取り扱い</p> <p>(③小池 祐史/4 回) 職業感染予防、病院感染対策における臨床検査技師の役割、感染管理と臨床検査、個人防御具着用方法</p>	オムニバス方式
		医療安全管理学	<p>医療の安全性の確保は、個々の医療従事者の努力が重要であることは言うまでもないが、病院全体としての安全管理体制の組織化が必要不可欠である。また、安全かつ安心な医療を提供するには、医療事故や医療過誤の発生原因、特徴、対策までの一連の概念を理解することが重要である。本科目では、医療安全の基礎知識や臨床検査部門における安全管理について、事例を交えながら初期対応、検証、防止策などについて学修する。また、正しい採血は臨床検査の精度保証にも関連するため、安全かつ標準的な採血法についても学ぶ。</p> <p>(オムニバス方式/全8回)</p> <p>(④磯辺 正道/4 回) 医療安全の概要、医療安全の基礎知識、臨床検査と医療安全、医療事故事例、(9 林 泰弘/4 回) 採血法 1、採血法 2、採血法 3、採血法 4</p>	オムニバス方式
	医療安全管理学実習	<p>平成 27 年に臨床検査技師等に関する法律が改正され、検体採取等の業務が臨床検査技師の業務範囲に含まれることになった。正しい検体の採取、保存、品質管理は、臨床検査の精度保証につながり重要である。本科目では、安全かつ標準的な採血法について、さらに鼻腔、咽頭、喉頭、皮膚、口腔、肛門からの検体採取として、解剖、採取法、管理法などの基礎を学び、安全かつ正しい検体採取法について実習する。</p>	共同	

専門教育科目	臨地実習	<p>臨地実習は、学内での講義および実習で学んだ知識や技術をもとに、臨床現場での実践的な臨床検査学を学ぶのみではなく、検査材料の取り扱い、検査機器の取り扱い、検査の情報管理や運営など、臨床検査業務にかかわる総合的な学修を目的とする。また、医療施設におけるチーム医療の一員としての臨床検査室および臨床検査技師の役割についての理解を深めることにつながる。</p>	共同
専門教育科目	卒業研究	<p>臨床検査は日々進化を遂げており、“今日の臨床検査”と“明日の臨床検査”に分けられる。“今日の臨床検査”は先人の学術成果が実用化され、臨床検査の現場で利用されている技術である。一方、“明日の臨床検査”は、医療の発展に向け、次世代のための技術を開発することである。臨床検査技師は、日常検査において異常データなどに遭遇することが多く、臨床検査の原理や患者情報からなぜそうなるのか、疑問に思い、気づきを備えることが“明日の臨床検査”につながる。本科目では、そのような臨床検査における観察力、洞察力、分析力を身に付けるための学修を行い、将来の医療の進歩に適応した臨床検査発展に寄与できる臨床検査技師の育成につなげる。</p>	共同

学校法人日本医療大学保健医療学部臨床検査学科設置認可等に関わる組織の移行表

令和2年度	入学定員	収容定員	令和3年度	入学定員	収容定員	変更の事由
日本医療大学			日本医療大学			
保健医療学部			保健医療学部			
看護学科	100	400	看護学科	<u>150</u>	<u>600</u>	(収容定員増認可申請)
リハビリテーション学科	120	480	リハビリテーション学科	120	480	
理学療法学専攻	80	320	理学療法学専攻	80	320	
作業療法学専攻	40	160	作業療法学専攻	40	160	
診療放射線学科	50	200	診療放射線学科	<u>100</u>	<u>400</u>	(収容定員増認可申請)
計	270	1,080	臨床検査学科	<u>60</u>	<u>240</u>	(学部の学科の設置認可申請)
			計	<u>430</u>	<u>1,720</u>	